ありえない、本当の話　その１．お正月

渓　かおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ありえない、本当の話　その１．お正月

【Ｎコード】
Ｎ３９０８Ｄ

【作者名】
渓　かおる

【あらすじ】
お正月、１月２日に起きたありえない、本当のお話です。

今年もいつものように家族３人で、新年を迎えました。

おせち料理は毎年縮小の一路を辿り、今年は更に、一品、一品の量さえも減らしました。

我が家は夫と娘、そして私の３人家族。昨年からしっかりメダボ判定を頂いた夫、大学卒業後胚培養師の資格をとったものの、その資格に疑問を抱く娘、そして私は世に言う所の更年期突入した？しない？４０肩？５０肩？の体調微妙な主婦。

そんな我が家での新年は毎年大晦日の年越し蕎麦を食べながら、迎えます。

そして、その際元旦の朝食時間を決め・・・今年も１０時になりました。・・・

その時間に皆が食卓を囲み、御屠蘇、おせち料理、鯛の塩焼き、お雑煮等でお祝いします。

皆で他愛も無い話をしながら、年賀状を読み、テレビ等をみて、そして夫と娘はそれぞれの部屋で自由に過ごします。

娘が大人になってからは、初詣に行く事も無くのんびり、ゆったり過ごすお正月です。

そんなお正月２日目。

夫は少し風邪気味とのことで、夜１０時前に部屋に戻りました。

娘と私も少ししてそれぞれの部屋に。

私は少し御屠蘇の酔いも手伝って、そのままベッドにもぐり込みました。

そのとたん、右下わき腹でグリグリッ！痛い訳ではありません。何かがお腹の中で蠢くうごめいた感じです。私はパジャマのズボンを少し下ろしてお腹を覗き込みました。
そのとたん、私の目の前にはありえないない光景が。

私のお臍の両側にしっかり、くっきりと足がみてとれます。
小さい足です。
小さい足が私のお腹を蹴っているのです。
その後、グッリン。
お腹の中で何かがひっくり返ったようです。

いつの間にか娘がベット脇に立っていました。
彼女は胚培養士になるために2年間大学病院の産婦人科病棟で研究生として勉強し、現在は病院近くの産婦人科のクリニックで働いています。

目を白黒させている私に向かって、娘は「逆子になったみたいね」と呟きました。

逆子？子供？赤ちゃん？？？？？？

なにがなんだかわかりません。

キョトンとしながら、頭の中はフル回転。分析！分析！分析！
今日は1月2日・・・という事は・・・エート・・・あったっけそんなこと？え～浮気なんか全くしてないよ！あったっけ？あたっけか？いつだ？いつ？エッ？？？？

落ち着け、今は1月2日。十月十日。エーといつだ？
１２月２日、１１月２日、１０月２日、９月２日、８月２日、７月２日、６月２日、５月２日、４月２日、一月づつ指折り数える。４月？３月？
何かあったっけ？？？
確かに、３月の私の誕生日。娘が院長のお供で北海道の学会に行くので、夫と二人よく行く近場の温泉へ出かけました。友人がオーナー権を持っているので、毎年５枚の利用券を送ってくれるのです。それを利用しての温泉泊となりました。その時、確かにその時数年ぶりに、そのようなお戯れがありましたっけ。フムフム。

何を納得しているんだ。私。

逆子？我に返って数分後に娘の呟きに返事をした。

又、グッリン。

「あっ、戻った」娘がまた呟く。冷静に。

その時、又ありえない光景が目の当たりに。

私の下腹部にくっきりと、男の子の小さいシンボルが現れたのだ。

「男の子です。」娘が落ち着いた声で呟く。

男の子？

ふ～ん男の子なんだ。

ふと、色々な事が心を過ぎる。

代々女系の家系である夫の父は次男である。長男には子供はいない。三男もいるのではあるが、幼い時に養子に出ている。要するに直系の男の子は夫になるとの事。私は子宝は神の思し召しとしか考えられないので、何の負い目も感じはしない。夫の両親は娘一人の私たちに、男の子を望む心は、おくびにも見せた事はなかった。しかし、男の子が生まれてくれれば嬉しいのかもしれない。それはそれで自然の中での幸せであるように思えた。

そんな感慨に耽っているときに、

又、グッリン。

せっかく逆子が戻ったのにとそれなりに不安を抱える風・・・の私。実際には、未だ実感がわかないので不安感が薄いのが事実だ。

娘が初めて、私のお腹を撫で回し始めた。

「大丈夫、これできちんと逆子から戻っている。」相変わらず冷静な娘の一言。

そんな会話の中、既に私は分娩台にいた。

「生まれた、男の子だ」静かな娘の言葉。

「生まれたの？赤ちゃんの声が聞こえないんだけど？」
やはり不安・・・風でしかない、私。他人事のようだ。

「大丈夫、声が小さいだけ」娘の力強い静かな声に、男ならしっかり泣け！という弟への指導がしっかり読み取れた。

「ただ、後産が出ないからいきんで」娘が呟く。
後産が出ない？そんな事って聞いた事がない。
心配要素には全く入らない私。
いきんでみる。
しかし、「いきむ」の意味がよくわからない。

静かに時間が流れたようだ。

私の父がちゃっかり、しっかりと新生児ベッドの横に張り付いている。
父にとっての初めての男の子の孫にご満悦でしっかりとの好好爺。
いくつになっても茶目っ気たっぷりの父は、つんつんと孫の手を嬉しそうに触っているのだ。

そういえば、私の弟にも男の子はいない。私の両親にとっても初めての男の子の孫になる。

遠くの窓越しに、私の母が、嬉しそうに大きく手を振っている。
母に向かって私は、口を大きく一文字一文字「な・ま・え」と伝えた。
名前を考えて欲しかったのだ。
生まれる前提がないので、当然名前等考えてもいない。
未だ実感がなく、私には未だ考えることすらできない。

「今から、私のクリニックに移る？」娘が静かに私に尋ねた。

後産がいつまで経っても出ないので、信頼している自分の勤め先の院長に診察をお願いしたいようだ、娘にはこの病院の若い男の先生

に対して信頼がもてないようである。しかし、実感のない私に、今更、後産のためだけに移動するだけの気力は無かった。

言葉に詰まっている私の前で、先生が後産が出た。と両手に翳して見せてくれた。

私は一言、冷静に呟いた、「それって、胎盤じゃなくって骨盤でしょ！」

そんな一言で、私の長い初夢はお開きとなりました。

おめでとうございますm（__）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3908d/

ありえない、本当の話　その１．お正月

2010年12月30日18時37分発行